

短期間の手術見学に行った際、目当ての手術が予定されていないというのは国内外問わず「手術見学あるある」かと思うが、今回、当初予定されていなかった聴神経腫瘍手術を急遽スケジュール変更し見学させていただいたのは、河野教授のご紹介のおかげであった。

最後になりましたが、本留学の機会を与えていただいた河野教授、そして全医局員の先生方に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

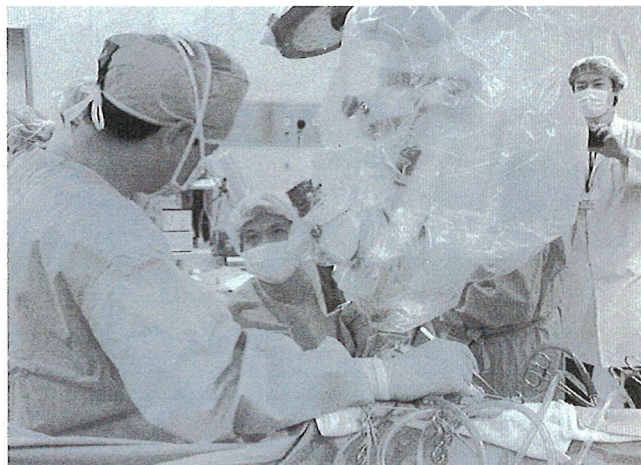
埼玉医科大学国際医療センター 脳血管外科 国内留学報告

田中悠二郎

かねてより脳卒中・脳血管障害に関して集中的に学ぶための機会を得たいと留学のチャンスを窺っておりましたが、2019年11月より5ヵ月という期間を頂きました。決して医局員が潤沢ではない医局にも関わらず、このようなチャンスを頂いたことを大変嬉しく感じておりますと共に、これまでの私の業務を引き継いでくれた先生方には感謝し尽くせない思いです。また、今回留学した各施設へ私をご紹介して下さり、実現のために尽力して頂いた河野教授にはこの場を借りて心よりお礼申し上げます。

本稿では2019年11月より2ヵ月間お世話になった埼玉医科大学国際医療センター（SIMC）脳血管外科のご報告を致します。この施設はセンター長かつ副院長でもある栗田浩樹先生が率いる国内随一の脳卒中センターだと認識しております。医療過疎の著しい埼玉西部・川越比企の脳卒中診療の中心的な施設となっており、特筆すべきは脳血管外科・脳血管治療科・脳血管内科の3つの科それぞれにその分野のエキスパートを配置し、協力しながらセンターを形成している点です。その結果、患者が正しく分散され、脳血管外科はまさしく外科医が診なければいけない患者の診療に集中することができるため、若いうちから手術中心の生活ができるのは大変魅力的に感じました。栗田先生を含めて9人という人数で年間600件近い手術（うち動脈瘤が200件前後）をこなしているという数字だけを見ても、その効率の良さが伺えます。修練医は外来を持たず、術後の患者はバイト先のクリニックでfollow upするという手法も大変うまく考えられていると感じました。血管内治療科との距離感も近く、毎週3回のstroke conferenceを3科合同で行っていることからわかるように、科の敷居をできる限り低くするよう配慮しておりました。

今回の見学で特に感銘を受けた点を2つ挙げます。1つ目は栗田先生の真骨頂はAVM手術だと思っていたのですが、それにも増して「脳血管外科医の育成」にここまで力を注いでいる先生を見たことがありません。たとえば手術に関しては、修練医の技量に合わせて症例を適切に割り当てて、術前のスケッチで技量を推し量り、手術中は助手鏡をのぞきながら直接指導し（術者の席に座ったのは、2ヵ月でわずかに1回のみでした！）、術後はビデオカンファレンスで反省会をするというルーチンを徹底しておりました。expertの先生方が何を考えながら手術をしているのか、見ていてもなかなかわからないことをしばしば経験しますが、栗田先生は隣で言語化して指導するタイプの先生ですので、これに耳を傾けているだけでも大変勉強になりました。2012年以降のほとんどすべての手術症例（約4000件！）がデータベース化されているため、術者は割り当てられた手術の勉強を過去の先輩方のビデオを見ながら復習することが容易にできます。わずか2ヵ月の間でも、若い先生がみるみる上手くなっていくのがよくわかりました。手術教育にとどまらず、時間があれば修練医各々から、ローテーションや留学希望等のヒアリングを行っているのにはとても驚きました。しかもその教育は10年生を見据えたものであり、血管内治療全盛期に、いかにして脳血管外科医が手術経験を増やすのか、その秘策をお聞きしたときの衝撃は忘れ得ません。「人を残すのが一流」と仰っておられましたが、栗田先生の熱意と才能溢れる指導はまさに一流で、毎日感動しておりました。SIMCを見学するまでは「日本一の脳卒中センター」というのが私の印象でしたが、それと同時に「日本一の脳血管外科医の修練施設」であるというのが現在の印象です。そんなわけで毎年志の高いたくさんの方の後期研修医が栗田先生の元にあつまっておりますので、近い将来SIMC卒業生が方々で脳血管外科医として活躍をするのではないかと期待してしま



手術中の指導風景



脳血管外科のスクラブを頂きました

います。

もうひとつは、international fellow が複数滞在しており、彼らとともに研修できたことが大変有意義でした。当時ベトナムから1名、ミャンマーから2名、ウズベキスタンから1名の fellow が在籍しており、私はそれに混ざる形で研修をしておりました。術前術後のスケッチを一緒に描いたり、術中はモニターを見ながらディスカッションしたり、食事を一緒に食べたりと、思いがけず1日のほとんどが英語を話して過ごすという生活でした。彼らは忙しく働き回っている修練医たちにはなかなかゆっくりと質問ができないので、私のことを気軽に話しかけられる通訳者と



留学生と

いう形で利用してくれて、ずいぶんとありがたがられました。栗田先生は international fellow に対しても大変熱心に指導されており、ビデオカンファレンスを英語でやったり、クリッピングをやらせてみたりと、彼らにとっても大変有意義な研修先なのではないかと感じました。SIMC は周囲に何も無い田舎ですので、俗世から距離をおき、国内留学ながらプチ海外留学を経験できたような気がします。

2ヵ月で30例の脳動脈瘤の絵を描き、約100例程度の手術ビデオを見ました。実際には見ているだけですが、何も上手くなっていないのですが、一生かけても経験できないような多数の高難度の手術を短期間でひたすら浴びるように見ると、見えていなかったことが見えてきて、想像していた以上のものを持ち帰ることができたように思います。